鴨長明著
佐藤正範校

方丈記讀本

東京　光風館藏版

K220.81
42

K220.81
42

鴨長明著
佐藤正範校

方丈記讀本

東京　光風館藏版

明治
43. 3. 9
内務

凡例

一本書は、中學校、師範學校、高等女學校、及び同程度の學校等に於ける教科用書或は參考用書に充つる目的を以て、校訂を施したるものなり。而して所定の教科用書を授け終へて、時間の餘裕を生じ、又は併せ課するに便ならしめむことを期したり。

一方丈記の文は、和漢調和文、千古の絶調にして、超脱高雅の趣を存し、直ちに現今普通文の模範となすに足る。されども、その適當の用書に乏しきを遺憾とす。これ本書を校訂して、各生徒に、熟讀翫味せしめむとする所以なり。

一本書全部を十五段に分ち、各段に題目を附し、句點、讀點を施し、文法、送假名を正しくし、各篇末に、文字の用法、文法、修辭法の說明、及び應用文等を挿入して、教授の便に供せり。

一現今の普通文は、漢字にて書くべき部分と、假名にて記すべき箇所と、自ら一定の慣例あるが如し。本書は、此等の文字を參酌校訂し、且俗字、訛字、略字等を避けたり。

一本書各篇末に挿入したる練習題、及び上欄用語等の説明に關しては、時間數に應じて、適宜に教授せられむことを要す。

明治四十三年一月　　校訂者識す

方丈記解題

一、要旨　本書は、作者、年來見聞せし事項を綴りたる隨筆にして、京都に於ける安元の大火、治承の旋風、遷都、養和の饑饉、疫癘、元暦の地震の實況を記し、自身の經歷、草菴の光景などを述べ、その間、佛説を擧げ、教訓となるべき事などをも説きて、超脱高雅の趣を存し、或は世上の榮枯を歎じ、或は人事の盛衰を論じて、その趣味の實に津々たるものあるを覺ゆ。

二、書名　本書は、作者その草菴の狀を記せる條に「その家の有樣世の常ならず。廣さは僅に方丈、高さは七尺ばかりなり」とあるに基ける名目なり。その方丈の語は、往昔、釋迦在世の時、天竺の維摩詰といひしもの、常に一丈四方の室にありて、説法得度したりし故事に出でたり。

三、著者　本書は、鴨長明の著なり。長明は、山城國賀茂社の氏人にして、祖父季長、父長繼、共に同社の禰宜たり。長明、性敏慧にして才學あり。和歌文章に巧にして、管絃の道にも通ぜり。二條天皇の應保年中、從五位下に敍せられ、後鳥羽天皇の朝、和歌所の寄人に擧げられたり。その後感ずる所あり、髮を削りて名を蓮胤と改め、洛外、大原の里に退隱せり。時に年五十なりきと。後に源實朝に招かれて鎌倉に下りしが、程なく歸りて、山城國、日野山に入り、自ら草庵を結べり。その生死の年月は詳ならざれども、一説には、近衞天皇、久壽元年(紀元千八百十四年)に生れ、順德天皇、建保四年(紀元千八百七十六年)年六十三にて寂せりと。本書は、建保年中の作なるべしといふ。

目次

第一段　發端……一
第二段　安元の大火……三
第三段　治承の旋風……四
第四段　治承の遷都……六
第五段　養和の饑饉……九
第六段　養和の疫癘……一一
第七段　元暦の地震……一四
第八段　退隱の意思……一六
第九段　大原山の閑雲……一九
第十段　日野山の草庵……二〇
第十一段　日野山の仙境……二三

第十二段　日野山の逍遙……二四
第十三段　日野山の花月……二七
第十四段　日野山の浮雲……二九
第十五段　西山の斜月……三一

目次終

方丈記讀本

鴨長明著
佐藤正範校

第一段　發端

論語子罕篇　子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

うたかた　玉敷の都　甍を爭ふ

逝く川の流は絶えずして、而も本の水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、且消え且結びて、久しく留ることなし。世の中にある人と住處と、亦かくの如し。玉敷の都の内に、棟を竝べ甍を爭へる高き賤しき人の住居は、代々を經て盡せぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、或は大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處も變らず、人も多かれど、古見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死に夕に生るゝ習、唯水の

無常を爭ふ

春秋

泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去るを。又知らず、假の宿り、誰がために心を惱し、何によりてか目を悅ばしむるを。その主人と住處と無常を爭ふ樣、言はゞ朝顏の露に異ならず。或は露落ちて、花殘れり。殘れりといへども、朝日に枯れぬ。或は花は萎みて、露猶消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。己物の心を知れりしよりこの方、四十餘の春秋を送れる間に、世の不思議を見ることゝ、やゝ度々になりぬ。

練　習

一、文字　○逝く——行く——適く　且——旦　亦——又　猶——尙　已——已——巳

二、文法　△絕え　盡せぬ　滅び　知らず…去るを　殘れり

三、修辭　×逝く川の流は……人と住家と亦かくの如し（譬喩）

四、解釋　且學び且習ひて朝に夕に倦むことなし。

知らず、ゆく川のながれのたえしことあるを。

安元三年は高倉天皇の朝、紀元一八三七年なり

戊の時

乾巽

現心

七珍萬寶

第二段　安元の大火

往ぬる安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、靜ならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來て乾に至る。果には、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜の程に塵灰となりにき。火本は、樋口富小路とかや。病人を宿せる假屋より出でたりとなむ。吹き迷ふ風に、とかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は烟に咽び、近き邊は、只管焰を地に吹きつけたり。空には、灰を吹き立てたれば、火の光に映じて普く紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人現心あらむや。或は烟に咽びて斃れ臥し、或は焰に紛れて忽に死にぬ。或は亦僅に身一つ辛くして遁れたれども、資財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となり

七珍は、金、銀、瑠璃、車渠、碼瑙、珊瑚、琥珀ないひ、七寶ともいふ。

あぢきなし

にき。その費いくそばくぞ。この度公卿の家十六燒けたり。況してその外は數を知らず。總べて都の中三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營皆愚なる中に、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費し心を惱すことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

練習

一、文字　○戌——戌——戌　乾——乾く　烟——煙　卿——郷　造る——作る

二、文法　△往ぬる　堪へ　越え　死にぬ　侍る

三、修辭　×遠き家は烟に咽ぶ(擬人)或は烟に咽びて：或は焔に紛れて：(對句)

四、解釋　七珍萬寶を得るにのみ心を惱すも、現心なきわざならずや。あだに年月を過すも、あぢきなきことならずやは。

治承四年は高倉天皇の朝、紀元一八四〇年なり。

第三段　治承の旋風

又治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極の程より、大なる

いかめし

檜皮、葺板

地獄の業風

坤の方

旋風起りて、六條わたりまで、△いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹き捲るまゝに、その中に籠れる家ども、大きなるも小きも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり。桁柱ばかり殘れるもあり。亦門の上を吹き放ちて、四五町が外に置き、亦垣を吹き拂ひて、鄰と一つになせり。況んや、家の內の寶、數を盡して空に揚り、檜皮、葺板の類、×冬の木の葉の風に亂△るゝが如し。塵を烟の如く吹き立てたれば、總べて目も見△え△ず。△夥しく鳴り動む音に、物いふ聲も聞△えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりにはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取り繕ふまに、身を害ひて不具づけるもの數を知らず。この風、坤の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。旋風は、常に吹くものなれど、かゝることやはある。唯事にあらず、×さるべきものゝ諭しかなとぞ疑

ひ侍りし。

練習

一、文字　○聳く——聳　見え——視る——觀る——看る　鳴る——鳴　聞え——聽く　歎く——嘆く

二、文法　△いかめし　亂るゝ　夥しく　見え——見る　やはある

三、修辭　×冬の木の葉の云々（譬喩）　さるべきものゝ諭しかな云々（警句）

四、解釋　すさまじき風、さながら地獄の業風の如く襲ひ來て、檜皮、聳板を剝ぎ散せり。

かばかりのことに、きもをつぶすことやはある。

治承四年六月、紀元一八四〇年、都を攝津の福原に遷し給ひしなり。

第四段　治承の遷都

又同じ年の六月の頃、俄に都遷侍りき。いと思の外なりしことなり。大方この京の初を聞けば、嵯峨天皇の御時、都と定りにけるより後、既に數百歳を經たり。異なる故なくて、容易く改るべくもあらねば、これを世の人、容易からず憂ひ合へる

理

主君の蔭を頼む

馬鞍を重くす

莊園

嚣し

樣、理にも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣公卿、悉く攝津の國、難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰か一人故郷に殘り居らむ。官位に思をかけ、主君の蔭を頼む程の人は、一日なりとも疾く移らむと勵み合へり。時を失ひ世に餘されて、期する所なきものは、憂ひながら留り居たり。軒を爭ひし人の住居、日を經つゝ荒れゆき、家は毀たれて淀川に浮び、地は目の前に畠となる。人の心皆新りて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時自ら事の便ありて、攝津の國の今の京に到れり。處の有樣を觀るに、その地程狹くて、條里を割るに足らず。北は山に傍ひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常に嚣しくて、鹽風殊に烈し。内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、

なか〳〵　塞き敢へず

衣冠布衣直垂

治承四年十二月、安德天皇福原より京に還御ありしなり。

御殿

なか〳〵　樣變りて、優なる方も侍りき。日々に毀ちて、川も塞き敢へず運び下す家は、何處に造れるにかあらむ。猶空しき地は多く、造れる屋は少し。古京は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人は、皆浮雲の思をなせり。本よりこの處に居れるものは、地を失ひて愁へ、今移り住む人は、土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乘るべきは、馬に乘り、衣冠布衣なるべきは、多く直垂を著たり。都の手風忽ちに改りて、唯鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか、聞き置けるも著く、日を經つゝ世の中浮き立ちて、人の心も治らず。民の愁遂に空しからざりければ、同じ年の冬、尙この京に歸り給ひにき。されど、毀ち渡せりし家どもは、如何になりにけるにか、悉く本の樣にしも造らず。仄に傳へ聞くに、古の畏き御代には、憐をもて國を治め給へり。卽ち御殿に茅を葺きて、軒をだに整へず。烟の乏しきを見給ふ時は、限ある貢物をさへ免されきと。これ民を惠み、世を助け給ふによりてなり。今の世の中の有樣、昔に準へて知りぬべし。

養和元年は安德天皇の朝、紀元一八四一年なり。

練習

一、文字　○同じ——仝じ　既に——已に　畠——畑——圃　著る——著し　傳ふ——傳

二、文法　△憂ひ　居らむ——居たり　浮び——浮ぶる——浮き　塞き敢へず

嘗し　著く——いちじるし

三、修辭　×主君の蔭を賴む（譬喩）　木丸殿もかくやと云々（引喩）

四、解釋　都のてぶりのひなびけるさま、いふかひなくて、ことわりにもすぎたりきといへり。

筑波嶺の此面彼面に蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし。（古今集）

茅を葺きたる御殿、なか〳〵優なる方に見えたりけり。

第五段　養和の饑饉

又養和の頃かとよ、久しくなりて慥にも覺えず。二年が間、世

ぞめきなし

操を作る
念じ侘ぶ

の中饑渇して、あさましきこと侍りき。或は春夏日照り、或は秋冬、大風大水など、善からぬ事どもうち續きて、五穀悉く實らず。空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、或は地を捨てゝ境を出で、或は家を忘れて山に住む。樣々の御祈など始り、なべてならぬ法ども行はるれども、更にその驗なし。京の習、何業につけても、皆本は田舍をこそ頼むるに、絶えて上るものなければ、さのみやは操を作り敢へむ。念じ侘びつゝ、樣々の寶物、片端より棄つるが如くすれども、更に目見立つる人もなし。偶〻換ふるものは、金を輕くし粟を重くす。乞食道の邊に多く、愁ひ悲ぶ聲耳に盈てり。

練　習

一、文字　○植う——栽う　捨つ——棄つ　始る——初　偶〻——適〻　偶——隅——遇

少水の魚
往生要集
是日已過、命則衰減、如少水之魚、斯有何樂。

築土の列

二、文法　△善からぬ事　植う　さのみやは　念じ侘び　見立つる
三、修辭　×或は春夏日照り、或は秋冬、大風大水など、善からぬ事云々。（雙關）
四、解釋　なべてならぬぞめきこそ、げにあさましかりけれ。
おのが心ををさめて、さのみやはかたちづくらむ。
わびぬれば松の風の淋しさも堪へてすまるゝ山の奥かな。（新拾遺集）

第六段　養和の疫癘

前の年かくの如く辛くして暮れぬ。明くる年は、立ち直るべきかと思ふ程に、剩へ疫病うち添ひて、勝る樣に迹方なし。世の人多く餓ゑ死にければ、日を經つゝ窮り行く樣、少水の魚の譬に合へり。果には笠うち著、足引き包み、宜しき姿したるもの、只管家毎に乞ひ歩く。かくわびしれたるものども、歩くかと見れば、則ち斃れ臥しぬ。築土の列、路の頭に、餓ゑ死ぬる類は數も知らず。取り棄つるわざもなければ、臭き香世界に

賤山がつ

勞はし

充ち滿ちて、變り行く形有樣、目も當てられぬこと多かり。況んや、川原などには、馬の行きちがふ道だにもなし。怪しき賤山がつも力竭きて、薪さへ乏しくなりゆけば、賴む方なき人は、自ら家を毀ちて、市に出ててこれを賣るに、一人が持ちて出でたる價、尙一日が命を支ふるにだに及ばずとぞ。怪しき事は、かゝる薪の中に、丹つき白金黃金の箔など、處々につきて見ゆる木の割相雜れり。これを尋ぬれば、すべき方なきものゝ、古寺に到りて佛を盜み、堂の物の具を破り取りて、割り碎けるなりけり。濁惡の世にしも生れ遭ひて、かゝる心憂きわざをなむ見侍りし。

又いと哀なる事も侍りき。去り難き女男など持ちたるものは、その志勝りて深きは、必ず先立ちて死にぬ。その故は、我が身をば次になして、男にもあれ女にもあれ、勞はしく思ふ方

法印

聖

緣を結ばしむ

に、偶、乞ひ得たるものを、先讓るに因りてなり。されば、親子あるものは、定れる習にて、親ぞ先立ちて死にける。又母が命竭きて臥せるを知らずして、幼き兒の、その乳房に吸ひ附きつつ、臥せるなどもありけり。仁和寺に、慈尊院の隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數を知らず死ぬることを悲みて、聖を數多語ひつゝ、その首の見ゆるごとに、額に阿の字を書きて、緣を結ばしむる術をなむせられける。その人數を知らむとて、四五兩月が程數へたりければ、京の中、一條よりは南、九條より北、京極よりは西、朱雀よりは東道の邊にある頭、總べて四萬二千三百餘なむありける。況んや、その前後に死ぬるものも多く、川原、白川、西の京、諸の邊地などを加へて言はゞ、際限もあるべからず。如何に況んや、諸國七道をや。近くは崇德院の御位の時、長承の頃かとよ、かゝる例はありけりと聞けど、そ

の世の有様は知らず。まのあたりいと珍かに悲しかりしことなり。

練習

一、文字　○則ち――即ち――乃ち　遭ふ――遇ふ――逢ふ　哀――衰ふ　我――吾――予――余

二、文法　△餓ゑ　見ゆる　心憂き　定れる習　いと珍かに悲しかりき

三、修辭　この章、滿目悽慘にして、鬼氣人を襲ふが如き趣あり（評語）

四、解釋　門より通るべき樣なくて、ついひぢのくづれより入りぬ。

梅の花匂ふ盛は山がつの賤の垣根もなつかしきかな。（風雅集）

元暦二年は文治と改元せし年にして後鳥羽天皇の朝、紀元一八四五年なり。

大なゐ

第七段　元暦の地震

又元暦二年の頃、大なゐふること侍りき。その樣世の常ならず。山は崩れて川を埋み、海は傾きて陸を浸せり。土裂けて水湧き揚り、巖割れて谷にまろび入る。渚漕ぐ舟は波に漂ひ、道行く駒は、足の立處を惑はせり。況んや、都の邊には、在々處々、

拉げなむ

堂舍塔廟一つとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬる間、塵灰立ち騰りて、盛なる烟の如し。地の震ひ家の壞るゝ音、雷に異ならず。家の中に居れば、忽ちに打ち拉げなむとす。走り出づれば、亦地割れ裂く。羽なければ、空へも揚るべからず。龍ならねば、雲にも上らむこと難し。恐の中に恐るべかりけるは、唯なゐふりなりけりとぞ覺え侍りし。その中に、或武士の獨兒の六つ七つばかりなりしが、築土の覆の下に小家を造り、はかなげなる迹なし事をして遊び居しが、俄に崩れ埋められて、迹方なく平にうち拉がれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母抱へて、聲も惜まず悲み合ひてありしこそ、哀に悲しく見侍りしか。子の悲には、猛きものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理かなとぞ見侍りし。かく夥しく震ることは、暫しにて止みにしが、その餘波厭、絶えず。世

はかなげ

迹なし事

いとほし

四大種　地水火風　ないふ

文德天皇齊衡三年紀元一五一六年大地震あり、その前後に屢〻地震ありたりき。

の常に驚く程のなゐふり、三三十度震らぬ日はなし。十日、三十日過ぎにしかば、やう〳〵間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日交ぜ、二三日に一度など、大方その餘波、三月ばかりやありけむ。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては、異なる變を成さず。

練　習

一、文字　○おほなゐ　浸す——侵す　渚——汀　恥——辱

二、文法　△なゐふる——なゐふり　埋み——埋められ　出づれ——出され

拉げ——拉がれ　交ぜ

三、修辭　×山は崩れて川を埋み、海は傾きて陸を浸せり。（對句）

四、解釋　ことわりにもすぎて、はかなくぞおぼえける。

我のみぞ我が心をばいとほしむ憐む人のなきにつけても（山家集）

第八段　退隱の意思

昔齊衡の頃かとよ、大なゐふりて、東大寺の佛の御ぐし落ち

御ぐし

あだなる樣

恐れ慄く

すぼき姿　つぼ

僮僕

蔑なるけしき

などして、いみじき事どもありけれど、猶この度には如かずとぞ。卽ち人皆あぢきなきことを述べて、聊か心の濁も薄らぐかと見し程に、月日重り年越えし後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。總べて、世のありにくきこと、我が身と住處との、はかなくあだなる樣かくの如し。況んや、處により身の程に從ひて、心を惱すことは、擧げて數ふべからず。もし自ら身數ならずして、權門の傍に居るものは、深く悅ぶことはあれども、樂ぶに能はず。歎ある時も、聲を揚げて泣くことなし。進退易からず、立居につけて恐れ慄く樣、譬へば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして、富める家の鄰に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、諂ひつゝ出で入り、妻子僮僕の羨める樣を見るにも、富める家の人の蔑なるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狹き地に

居れば、近く炎上する時、その害を免るゝことなし。もし邊地にあれば、往反煩多く、盜賊の難離れ難し。又勢あるものは貪欲深く、獨身なるものは輕しめらる。寶あれば恐多く、貧しければ歎切なり。人を賴めば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛に使はる。世に從へば身苦し。亦從はねば狂へるに似たり。何れの處を占め、如何なるわざをしてか、暫しもこの身を宿し、玉ゆらも心を慰むべき。

はごくむ

玉ゆら

練　習

一、文字　○悅ぶ—喜ぶ—歡ぶ　薄らぐ—薄　泣く—啼く—鳴く　貧し—貧る　切—功—巧

二、文法　△落ち—落す　いみじき事　惱す—惱む　輕しめらる

三、修辭　×心の渴も薄らぐ　雀の鷹の巢に云々（譬喩）

四、解釋　たまゆらも、はかなくあだなることに、心をよすることなかれ。惠まむと思ふ心は廣けれどはぐくむ袖の狹くもあるかな。（金葉集）

大原山は山城の國乙訓郡にあり。

金葉集　住みわびて我さへ軒の忍草忍ぶ方々しげき宿かな。　周防內侍。

居屋

たづきなし

白波の恐

よすがもなし

執を留めむ

第九段　大原山の閑雲

吾が身、父の方の祖母の家を傳へて、久しく彼處に住む。その後、緣缺け身衰へて、忍ぶ方々繁かりしかば、遂に心留むることを得ずして、三十餘にして、更に吾が心と一の庵を結ぶ。これをありし住居に準ふるに、十分が一なり。唯居屋ばかりを構へて、捗々しくは屋を造るに及ばず。僅に築土を築けりといへども、門を立つるにたづきなし。竹を柱として車宿りとせり。雪降り風吹く毎に、危からずしもあらず。處は川原近ければ、水の難も深く、白波の恐も騷し。總べて、あらぬ世を念じ過しつゝ、心を惱ませることは、三十餘年なり。その間、折々の遣目に、自ら短き運を悟りぬ。卽ち五十の春を迎へて、家を出で世を背けり。素より妻子なければ、捨て難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執を留めむ。空しく大原山の雲

に臥して、又五かへりの春秋をなむ經にける。

練　習

一、文字　○菴——庵　唯——只——啻に　騷し——搔く　惱す——腦

二、文法　△忍ぶ　捗々し　背けり　春秋をなむ經にける

三、修辭　×白波の恐も騷し（引用語）（緣語）

四、解釋　白波の恐をさくべきたづきを求めむとす。

ふみをまなぶよすがとならぬにしもあらざらむ。

日野山は山城の國宇治郡木幡山の東北に當れりといふ。

第十段　日野山の草菴

茲に×六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。言はゞ旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住處に準ふれば、亦百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、住處は折々に狹し。その家の有樣世の常ならず。廣さは僅に方丈、高さは七

土居打覆

簀の子　閼伽棚

帳の扉

折箏　ほどろ　東竝

尺ばかりなり。處を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて造らず。土居を組み打覆を葺きて繼目毎に繫金を繫けたり。もし心に合はぬことあらば、易く外に遷さむがためなり。その改め造る時、幾何の煩かある。積む所僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途要らず。

今、日野山の奥に迹を隱して後、南に假の日隱しをさし出して、竹の簀の子を敷き、その西に閼伽棚を造り、中には西の垣に傍へて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢竝に不動の像を掛けたり。北の障子の上に、小き棚を構へて、黑き皮籠三四合を置けり。卽ち和歌、管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶、各、一張を立つ。謂はゆる折箏、繼琵琶これなり。東に傍へて、蕨のほどろを敷き、束竝を敷きて夜の床とす。東の壁に窗を明けて、此

女墻

爪木

處に文机を出せり。枕の方に炭櫃あり、これを柴折りくぶるよすがとす。菴の北に少し地を占め、あばらなる女墻を圍ひて園とす。卽ち諸の藥草を栽ゑたり。假の菴の有樣かくの如し。

練　習

一、文字　○蠶の繭　準ふ——擬ふ　帳——悵　筆——琴

二、文法　△老い　占め　報ゆる　謂はゆる　出せり

三、修辭　×六十の露消えがた云々（譬喩）　假の菴の有樣かくの如し（結句）

四、解釋　寶の子にそへて文机と束竝とあれば、人の居らぬにはあらじ。あばらなるひめがきをゆひて、占めたる地を圍ふよすがとせり。くるゝ間もまつべき夜かは仇野の末葉の露に風たつなり。（新古今集）

第十二段　日野山の仙境

その處の樣をいはゞ、南に筧あり。岩を疊みて、水を溜めたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。眞

眞栫の羅
觀念の便

死出の山
茅蜩
うつせみ

口業を修む
報恩經
一切衆生禍從レ口生。

拾遺
世の中は何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟の迹の白波。
沙彌滿誓。

琵琶行
潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟々。
白樂天。

栫の羅迹を埋めり。谷茂けれど、西は晴れたり。觀念の便なきにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにして西方に匂ふ。夏は郭公を聞く。語ふ毎に死出の山路を契る。秋は茅蜩の聲、耳に盈てり。うつせみの世を悲むかと聞ゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆる樣、罪障に譬へつべし。もし念佛懶く、讀經まめならざる時は、自ら休み自ら怠るに妨ぐる人もなく、亦恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。もし迹の白浪に身を寄する朝には、岡の屋に往き交ふ舟を眺めて、滿沙彌が風情を偷み、もし桂の風、葉を鳴す夕には、潯陽の江を思ひやりて、源都督の流を習ふ。もし餘りの興あれば、屢、松の響に秋風の樂を類へ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばし

めむとにもあらず。獨調べ獨詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

練習

一、文字　○爪―瓜　匂ふ―匂―勾　妨ぐ―防ぐ―坊　偷む―盗む―竊む

二、文法　△埋めり　語ふ　恥づ　居れば　類へ　あやつる。

三、修辭　×春は…夏は…秋は…冬は…（列敍）　迹の白浪…桂の風…（引喩）。

四、解釋　心ものうく、まめならざる時には、水の音に類へて琴をかなでぬ。うつせみの世にもにたるか花櫻さくと見しまに且ちりにけり。（古今集）

徒然

第十二段　日野山の遊遙

又麓に一つの柴の菴あり。即ちこの山守が居る處なり。彼處に小童あり、時々來りて相訪ふ。もし徒然なる時は、これを友として遊び歩く。彼は十六歳、我は六十、その齡殊の外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或は茅花を抜き岩梨を採り、又

ぬかご　秋回

穂組

木幡山は山城の國宇治郡にあり。白氏文集勝地本來無二定主一、大山都因二愛レ山人一。岩間石山共に近江の國滋賀郡にあり。

家苞

猿の聲

玉葉集山鳥のほろ〳〵となく聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞおもふ。行基菩薩。かせぎ

ぬかごを盛り芹を摘む。或は秋回の田居に下りて、落穂を拾ひて穂組を作る。もし日麗かなれば、嶺に攀ぢ登りて、遙に故郷の空を望み木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障なし。歩煩なく、志遠く至る時は、これより峯續き、炭山を越え、笠取を過ぎて、或は岩間に詣で、或は石山を拜む。もしは粟津の原を分けて、蟬丸翁が迹を訪ひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓を尋ぬ。歸るさには、折につけつゝ、櫻を狩り紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り且は家苞にす。もし夜靜なれば、窗の月に古人を偲び、猿の聲に袖を霑す。叢の螢は、遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨は、自ら木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火を掻き熾して、

あからさま

やむごとなき人

寄居蟲

鳲鳩

老の寢覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲を憐むにつけても、山中の景色、折につけて盡くることなし。況んや、深く思ひ深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。大方この處に住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを經たり。假の菴も、稍古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔蒸せり。自ら事の便に都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人の隱れ給へるも數多聞ゆ。況してその數ならぬ類、盡してこれを知るべからず。度々の炎上に滅びたる家亦いくそばくぞ。唯假の菴のみ長閑けくして恐なし。程狹しといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身を宿すに不足なし。寄居蟲は、小き貝を好む。これよく身を知るによりてなり。鳲鳩は、荒磯に居る。則ち人を恐るゝがゆゑなり。我亦かくの如し。身を知り世を知れらば、願はず交らはず、唯

眷屬

親昵

靜なるを望とし、憂なきを樂とす。

練習

一、文字　○麓―ふもと　折る―拆く―析つ―拆　偲ぶ―忍ぶ　馴る―慣る―狎る　畫―書―晝　座―坐す

二、文法　△詣て　似たり　盡くる　知れらむ―知れらば　交らはず

三、修辭　×勝地は主なければ云々　山鳥のほろ〳〵と鳴くを云々（引句）

寄居蟲は……鳲鳩は……我亦かくの如し。（譬喩×隆關）

四、解釋　すそわのたゐなる假菴をいでゝ、人の許を訪ひしが、かへるさには、彼此といへづとなどをもおくられけり。

山深みなるゝかせぎのけ近さに世に遠ざかる程ぞしらるゝ。（玉葉集）

第十三段　日野山の花月

總べて、世の人の住家を造る習、必ずしも身のためにはせず。或は妻子眷屬のために造り、或は親昵朋友のために造る。或は主君師匠及び財寶馬牛のためにさへこれを造る。我今身

たゆからず

のために結べり。人のために造らず。故如何にとならば、今の世の習、この身の有様、伴ふべき人もなく、頼むべき奴もなし。假令廣く造れりとも、誰をか宿し誰をか据ゑむ。それ人の友たるものは、富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。唯絲竹花月を友とせむには如かず。人の奴たるものは、賞罰の甚だしきを顧み、恩顧の厚きを重くす。更にはごくみ憐ぶといへども、安く靜なるをば願はず。唯我が身を奴とするには如かず。もしなすべき事あらば、則ち自ら身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ人を顧みるよりは易し。もし歩くべき事あらば、自ら歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心を惱すには似ず。今一身を分ちて、二の用をなす、手の奴、足の乘物、よく我が心に合へり。又心身の苦みを知れらば、苦む時は休めつ。まめなる時は使ふ。使ふとても度々過さず。懶しとても、心を動すことなし。如何に況んや、常に歩き常に働くは、これ養生なるべし。何ぞ徒に休み居らむ。人を苦め人を惱すは、亦罪業なり。いかゞ他の力を借るべき。

藤の衣

練習

一　文字　○習——倣ふ　伴ふ——友　頼む——憑む　恃む　罰——罰

二　文法　据ゑ　如かず　人を從へ——人に從へ　顧みる　休めつ

三　修辭　×まめなる時は使ふ、使ふとても云々（反覆）　常に歩き云々（警句）

四　解釋　妻子眷屬の頼むべきものなきにしにもあらざるべし。

手足のたゆきにも、こゝろはたゆきことなし。

第十四段　日野山の浮雲

衣食の類亦同じ。藤の衣、麻の衾、得るに隨ひて肌を隱し、野邊の茅花、峯の木の實、僅に命を繋ぐばかりなり。人に交らざれ

まだし
うたゝね
三界
由なし
華嚴經
三界唯一心、心外無二別法、心佛及衆生是三無二差別。
分野
莊子秋水篇
惠子の語に子非魚、安知二魚之樂一とあり。

ば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、猶味を甘くす。總べて、斯樣の樂、富める人に對していふにはあらず。唯我が身一つに取りて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。大方、世を遁れ身を捨てしより、怨もなく恐もなし。命は天運に任せて、惜まず厭はず。身をば浮雲に擬へて、賴まずまだしともせず。一期の樂びは、うたゝねの枕の上に極り、生涯の望は、折々の美景に殘れり。

それ三界は、唯心一つなり。心もし安からずは、牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望なし。今寂しき住居、一間の菴、自らこれを愛す。自ら都を出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りて此處に居るときは、他の俗塵に著することを憐ぶ。もし人、このいへることを疑はゞ、魚と鳥との分野を視よ。魚は水に厭かず。魚にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。誰か悟らむ。

練　習

一、文字　○繫ぐ―繫つ　寂し―淋し　厭く―壓す
二、文法　△得　乏し　擬ふ　まだし　居る
三、修辭　×三界は唯心一なり　魚は水に厭かず（引句）
四、解釋　我の卿等を得たるは、魚の水あるが如く、亦よくその心を知る。身をば雲心は水になしつれば人をも世をも恨みざりけり。（夫木集）

第十五段　西山の斜月

餘算
かこたむ

抑、一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はむ時、何のわざをかかこたむとする。佛の人を教へ給ふ趣は、事に觸れて執心なかれとなり。今草の菴を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂を述べて空しくあたら時を過さむ。靜なる曉、この理を思ひ續けて、自

ら心に問ひて曰はく、世を遁れて山林に交るは、心を修めて道を行はむがためなり。然るを、汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり。住家は、卽ち淨名居士の迹を汚せりといへども、保つ處は、僅に周梨槃特が行にだにも及ばず。もしこれ貧賤の報の自ら惱すか。將亦妄心の至りて狂はせるか。その時心更に答ふることなし。唯に舌根を備ひて、不請の念佛、兩三遍を申して止みぬ。時に建暦の二とせ、彌生の晦日頃、桑門、蓮胤、外山の菴にてこれを記す。

淨名居士は維摩詰のことなり。

周梨槃特

彌生の晦日頃

月かげは入る山の端もつらかりき
たえぬひかりを見るよしもがな。

この歌、新勅撰和歌集に、不斷光佛なよめる。源季廣とあり。

練習

一、文字　○給ふ——賜ふ　趣——趨く——赴く　料——料　止む——已む——罷む

二、文法　△かこたむ　敎へ給ふ　汚せり　狂はせる

三、修辭　×自ら心に問ひて曰はく云々（自問）

四、解釋　よしなきことをいひてかこつもいかゞはせむ。
眺むれば月傾きぬあはれわがこの世の程もかばかりぞかし
（後拾遺集）

K220,8

方丈記讀本

終

明治四十三年三月一日印刷
明治四十三年三月三日發行

方丈記讀本
定價金拾五錢

校訂者　佐藤正範

發行者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一

發行所　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店
（電話本局二千三十九番）（振替口座東京三二七番）

印刷者　東京市神田區裏神保町六番地　矢島一三

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

著作權所有

師範·中學及實業學校
國語漢文教科用書

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

師範學校 **國文教科書** 本科用
十二訂正版 和裝美本全六冊 正價三圓三各金參拾五錢

同 師範學校 **國文教科書** 第二部用
四訂正版 和裝美本全壹冊 正價金參拾五錢

同 師範學校 **國文教科書** 豫備科用
三訂正版 和裝美本全參冊 正價各金參拾五錢

同 師範學校 **國文教科書** 講習科用
新刊 和裝美本全四冊 正價各金參拾五錢

東京帝國大學文科大學講師 東京高等師範學校教授 文學士 中村久四郎編

師範學校 **漢文教科書**
再訂正版 和裝美本金四冊 正價各金參拾錢

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

中學 **國文教科書**
再訂正版 和裝美本金拾冊 正價各金貳拾五錢

東京帝國大學文科大學助教授 東京高等師範學校教授 文學士 保科孝一編

實業學校 **國語教科書**
新刊 和裝美本全六冊 正價各金貳拾五錢

佐賀縣唐津中學校教諭 松尾捨治郎著

日本文法教本
再訂正版 綱要篇 金參拾五錢 本篇 金五拾五錢 附錄 金五拾五錢

233
90